

人の死と死後

[その一]

～ 日本禅仏教による人生の展望 ～

The Human Death and Post-mortem

[Part 1]

～ The Vision of Japanese Zen-Buddhist Anthropology ～

霧 島 怜

Rei S. Kirishima

目 次

- 序 ～人^{せい}葬の生き甲斐とその意味
1. 釈尊による人の死と死後界の理解
 2. 初代仏教による人の死と死後界の理解
 3. 道元禅師による人の死と死後界の理解
 4. 人格的自己の今生諸行, その死と死後の禍福
- 註
- 使用文献
- Resume

序 ～ 人^{せい}葬の生き甲斐とその意味

我々が何のためにこの世に生まれ、何を生き甲斐として人^{せい}葬を歩んでいるのかと尋ねれば、ほとんどの人は考えずに「幸せのため」と答えるであろう。ただし、この「しあわせ」の意味と内容が多重多様に理解され、追求されているのも事実である。しかし、多重多様な幸せが考えられると言っても、よくよく考えるとその中身も千差万別で全てが幸せでなければ全ての「幸せ」が真の幸せであるという事はないのも事実である。結局のところは、いわゆる身分、地位、富、権力、名声や娯楽等の現世的な事柄を本末とする「幸せ」は全て短期で儂いものであり、しばしば他人の搾取、被害、苦痛、貧困、屈辱や不幸から生ずる境遇である。さらに、この世の最高権を握る者達でさえ不幸の土台とも言える病苦と老衰を逃れることが出来ない。金銭、名声、軍事力や圧力の行進を用いても真で永久の幸せを手に入れることが(出来)なければ、自他の尊敬を絶対に買う事が出来ないのも自明の事実である。万代万人の最大で真の聖哲は、人間一人一人が賦与されている「人間性」

つまり人間の本来徳力の迷悟的で善悪的な性能を活用する事に因って現世的な禍福を或る程度まで、そして死後の禍福を永遠普遍の秩序を司る因果法と業報法（正義）に順じて100%で実現出来るのであると口を揃えて教示するのである。

仏教、特に**道元禪師**によると、人とは前生諸行の果報として人格的で個性的な身心をしてこの世に生まれ、種々苦楽を味わい、迷悟と善悪等の様々な活動を行じた挙げ句この世で死んでゆく仏命の個現（仏命の妙現、命我）である。当然、人の死もこの世に生きる仏命の人格的な妙現の異なる活現であり、死後の境遇、その貴賤と禍福も又同じ妙現の前生中の迷悟的で善悪的な生き方（「自業」）の自然で必然的な結果（果報、熟果、「自得」）であると観ている。

キリスト教、特にその主流をなす**カトリック系**のスコラ（聖トマス・アクィナス）学派によると、人とは三位一体的な神にかたどられて創造された人格的で個性的な生き物である。人は霊物一体としてこの世に生まれ、苦楽を味わい、迷悟と善悪等の行為をもって生き、そして死の時に人体と別れて行く靈魂である。人の死が人間性の天然徳力の一つであるだけでなく、人祖の原罪と称ぜられる「自己神格化の試みの罪」に対する唯一の絶対神の当然当たり前の処罰であり、神の御摂理による永遠来生への通過路でもある。死後の新境遇、その貴賤と禍福はこの世における本人の善悪と正邪の生き方（自業）と神の恵（他力）の自然で必然的な果報である。

一方、人が死ぬとその靈魂が身体と同様に解体され、「絶無」（存在的ゼロ）に転ずる故に死後がなく、この世において迷悟や善悪として成し遂げた行為に対して現世においても死後においても応報がなければ、責任も一切問われないと主張する者は昔も今もいる。しかし、これらの者は建て前と口先を別として、「人権平等」、「自己表現の自由」、「人類進歩の促進」、「祖国の利益」、「独裁からの開放」や「世界貿易の自由化」等という名高いスローガンの下に事実上で自他優劣主義、私利私欲主義、勝手気儘主義、自己本位主義、弱者と無防備の者達を搾取したり抹殺したりする無責任の生き方を正当化しようとするだけである。彼らはそう言った「自己表現の自由」、「人類進歩の促進」、「祖国の利益」、「独裁からの開放」や「世界貿易の自由化」が彼ら自身の私利私欲、自己本位や安全性を損なう時にこれを不公平、差別、人権損害と声を高くあげて四方八方に訴えている二重標準と二枚舌の者達である。

家庭内暴力、子どもの虐待、胎児殺害、性犯罪、少女と少年の売春、親子の殺し合い、家庭内離婚、心の空白化、良心の砂漠化、自殺、他者他民の貧苦の無視、国家と地方行政の指導部による国民弱者の搾取とその苦勞の無視、戦犯崇拜、悪質な新興宗教と政党、孤独で人生に絶望した者はどうして激増しているかを真面目に考えたことがありますか？「神仏がなく、人が死ぬと最終的に絶無に転ずる」のであれば「責任」も「見仏慈人」も、「敬天仁人」も「愛神愛人」も、他者の生命も人権も、平等も公正も当然愚かで非科学的な宗教家（キリストも釈尊も、老師もマホメット他も）と彼らによって洗脳された門弟と信奉者の大戯言であり、空前前後の荒唐無稽である。神仏がなく死後もなければ拒神無仏主義や神仏を軽視する遺族が葬儀やお彼岸の時に「ゼロ」になった父母や

存在しない永遠の安らぎを「ダレ」に祈願し、ナニモノの為に冥福を念じ、ゼロに転じた人霊や解体し腐朽し始めた屍に見栄を張ってお別れをするとはどういう意味であろうか？ 上記のような考え方と行動について既（前論文集）に述べたのでここで省略する。

先ほど言及した拒神拒仏主義者や絶無主義者でさえ自分が勝手気儘に扱われ、他者の本意的な言行によってその私利私欲が犯され、より高い身分・職位や実力者によって搾取されるのもあまり好んでいないばかりではなく、その不公正等を死ぬまで追求し、「絶対に赦さない」のである。しかし、彼らも他人に一切迷惑を掛けない限り、自分の意思を他者に押し付けない限り、自分の現世今生の生き方とその禍福を執行する権利が有る。ただし、唯一神、仏、梵や天を否定し、それを憎んだり又は無視したりするならば、その恵愛と栄福に参ずることを期待するのは支離滅裂の論理である。又、仁人、慈人、義人や愛人の道に逆らったり無視したりして生きるならば、それらの道を誠実に歩もうと努力してきた者達と同等な「報い」を期待するのも妄想であり、「迷中又迷」ではないだろうか。

以下、身分の貴賤、権力の高低、富裕の有無と大小、能力の優劣、人種、国民、男女、教育や職位等の差別無し、一人一人の人毙の究極的な目的、死の価値とその意味、死後の来生、その境遇の貴賤と禍福の判定と決定について釈尊とキリスト、初代仏教と初代キリスト教、道元禅師と聖トマス・アクィナスの教示を軸に説述する。そして、彼らの言葉が信用に値しないと言うならば、誰の教行信証が信用に値するのであろうか。

日本禅仏教による人生の展望

1. 釈尊による死と死後界の理解

釈尊は自他人毙の最大の苦しみと見なされる病老死に関し、若き自分の心境とその正解追求の決意を弟子達に語り、「阿含経」がこれをこう伝えている。

『比丘たちよ、わたしもまた、実に、ほとけとなる以前まだ正しいさとりを得ていない菩薩であったころには、…そういうわたしに次のような思いが起こったのである。—— 何ゆえにわたしはおのれの自身、生まれ老い病み死ぬ性質のものであり、悲しみありけがれある性質のものでありながら、同様に生まれ老い病み死ぬ性質のものを求め、同様に悲しみありけがれある性質のものを求めているのか。おのれ自身、生まれ老い病み死ぬ性質のものであり、悲しみありけがれある性質のものでありながら、生まれ老い病み死ぬ性質のものの中にわざわいあるを知り、悲しみありけがれある性質のものの中にわざわいあるを知って、生まれることなく老いることなく病むことなく死ぬことのない、悲しみなくけがれのない、無上な、静寂な涅槃をもとめねばならないではないか、と』（『阿含経』、仏伝、3）⁽¹⁾。

釈尊は七年間の苦行によって最も惨め、孤独で厭い嫌う者となった。裸体で食事をほとんど断ち、

非常に烈しい頭痛、腹痛や高熱に耐え、極度に痩せて脊骨が現れて凸凹なのが紡錘を連ね、肋骨も現れ、眼窩も落ち窪んで眼だけが光ったと言う哀れな姿になった。にも拘らず病老死苦の解決に至らなかった。彼はこの厳しい苦行を取り止めた。そして、万代万人の兇悪と墮落の代表と結晶である淫・名と権の自己本位の放埒という「魔の誘惑」に打ち勝った後、集中した心で菩提樹の下に坐ってこう念じた。

『誠にこの世界が悲惨なものである。人は生まれ、老い、死に、去り、そして次の生涯に生まれる。しかも尚この苦しい老い・死から離れることを知らぬ。…——何がある時「老・死」があるか、何によって「老・死」があるか、と。比丘たちよ、その私は理に叶った考察と正しい智恵とによってこのように了解した。——「出生」がある時「老・死」がある、「出生」によって「老・死」がある、と…「おろかさ」がある時「迷妄な人間生活の内容を成す諸行為」がある。「おろかさ」によって「迷妄な人間生活の内容を成す諸行為」がある、と。…このようにしておよそすべての苦の集まりが起こるのである。…比丘たちよ、以前には聞いたことのない法〔「因果縁起法」〕に対して私の眼が開き、理解が生まれ、了解が生まれ、智恵が生まれ、光が生まれた。比丘たちよ、…——何が無い時「老・死」はないか、何の消滅によって「老・死」の消滅があるか、と。比丘たちよ、…——「出生」が無い時「老・死」は無い。「出生」の消滅から「老・死」の消滅がある、と。…わたしは清らかで常人のものを超えた天眼をもって諸々の衆生の死しつつある者、生まれつつある者を見た。諸々の衆生がおのおのの業に従って、卑賤な者となりあるいは高貴な者となり、美しい者となりあるいは醜い者となり、よい境涯へあるいは悪い境涯へ行くのを私は知った。…こうして私は「これは苦である」…「これは苦を生ずる原因である」…「これは苦の消滅である」…「これは苦の消滅に至る道である」とありのままに知った。…「淨らかな道」〔「四諦八正道」と「有餘依解脱」〕は完成した。なすべきことはなし終えた。さらにこのような生を受けることは無い」と知った。比丘たちよ、…無知が消えて智が生じ、闇が消えて光が生じた。それは安逸に流れずに熱心に努力している者の上にまさにそのように生ずるのである』(「阿含経」, 仏伝, 11)⁽²⁾。

苦行時代の仲間であった五人の比丘達に自分が悟った生死、病老、苦楽の因縁とその消滅の道理を教説し終えた世尊は彼らの新しい心境についてこう述べている。

『病むことの無い…死することのない(不死、輪廻転生の超脱)…愁い悲しむことのない…穢れることのない不生にして無上安穩の涅槃を求めてその涅槃〔有餘依解脱〕を獲得した。かくして、かれらに次のような知見が生じたのである。すなわち、——我々の悟りは不動のものである。これは最後の生である。もはや、再び生(まれ変わる事によって様々な苦しみを味わい死に、又生まれ変わり…)を受けることはなからう、と』(「阿含経」, 仏伝, 16)⁽³⁾。

或る折に弟子マールンキヤプッタは宇宙万物、特に生きとし生けるものの運命道理を冥想していた時に、世界が有窮か無窮か、人間の生命とその身体が同一のものか異なるものか、そして人が死後に存在するか滅するかについて疑念が生じたので釈尊の立場を確認するためにその教示を求め

た。その時釈尊は上記の事柄、特に人間死後の存没について次のような立場を示した。

『マールンキヤーブッタよ、生命と肉体とは同一のものであるという見解がある時、清らかな修行に住ずることもあろう』というようなことはない。「生命と肉体とは異なったものであるという見解がある時、清らかな修行に住ずることもあろう」ということも又有り得ない。生命と肉体とは同一のものであるという見解があろうと、あるいは生命と肉体とは異なったものであるという見解があろうと、まさに生まれることはあり、老いることはあり、死することはあり、愁い、悲しみ、苦しみ、憂い、悩みはあるのである。私は現実の世界においてそれらの制圧を知らしめるのである。マールンキヤーブッタよ、「人は死後にも存在するという見解がある時、…人は死後には存在しないという見解がある時、清らかな修行に住ずることもあろう」ということも又有り得ない。人は死後にも存在するという見解があろうと、あるいは人は死後にも存在しないという見解があろうとまさに生まれることはあり、老いることはあり、死することはあり、愁い、…マールンキヤーブッタよ、「人は死後にも存在し、かつまた存在しないという見解がある時、清らかな修行に住ずることもあろう」というようなことはない。「人は死後に存在するのでもなく、存在しないのでもないと言う見解がある時、清らかな修行に住ずることもあろう」というようなこともまた有り得ない。人は死後にも存在し、かつまた存在しないという見解があろうと、あるいはまた人は死後に存在するのでもなく、存在しないのでもないという見解があろうと、生まれることはあり、老いることはあり、死することはあり、…マールンキヤーブッタよ、それ故ここでは私によって説かれなかったことを説かれなかったものとして汝は受持せよ。…マールンキヤーブッタよ、しからば、何故にそのことが私によって説かれなかったのであろうか。マールンキヤーブッタよ、そのこと〔に関する知識〕は利益を伴うものではなく、清らかな修行の基礎となるものではなく、世俗的なものを厭い離れること、欲望から離れること、煩惱を止滅すること、心の静寂・優れた智慧・正しい覚り・涅槃のために役立つからである。それ故に私によってそれが説かれなかったのである』（『阿含経』、教説、1.8）⁽⁴⁾。

しかし、同じ「阿含経」によると、別の折に釈尊は人間の生命とその身体の異同、そして人の死後の存滅について**曖昧な「差し控え」**の立場ではなく、人をしてこの現象界に生き死した仏命の妙現が、「業熟体」として、厳密に言えば「業熟妙我」として**死後の「中有」を生きながら変成して**行くと明示する。その期間中に各人の妙我（業熟妙我）の前生諸行に順応する果報として自らの**次生境遇が貴賤的で禍福的に完熟する**ということも明確に述べている。その事柄について世尊は弟子達にこう語った。

『比丘達よ、この世において或る一部の人が心の汚れているのを、私は心（つまり仏心眼、正覚眼又は正法眼）によって（他人の）心を知っている。もしこの人が今死ぬとせんか、比丘達よ、ちょうど地獄の中に運ばれて置かれたように（彼は地獄に運ばれ置かれる）。それはどういうわけか。比丘達よ、彼の心は汚れているからである。また比丘達よ、心が汚れていることによって、このように、この世において或る一部の人は身体が壊れて死んで後、苦処・悪趣・剣難処・地獄に生まれ〔て生き、そして又死ぬのであ〕る、と。比丘達よ、この世において或る一部の人が

が心の淨いのを、私は心によって（他人の）心を知っている。もしこの人が今死ぬとせんか、比丘達よ、ちょうど天界に運ばれて置かれたように（彼は天界に運ばれ置かれる）。それはどういうわけか。比丘達よ、彼の心が清浄であるからである。また比丘達よ、或る一部の人々は心が清浄であることによってこの世において身体が壊れて死んで後、善趣・〔又は〕天界に生まれ〔変わ〕るのである』（「阿含経」、教説、2.10）⁽⁵⁾。

又別の際、人々が切に望み求める永遠無尽の慶福、つまり不死無病、無老無苦、極楽栄光、全智と一切繫縛からの自由を意味する般涅槃の境地について世尊は次のように述べている。

『この世において智慧ある比丘〔と門徒〕は欲と貪りとを離れ、不死・寂靜・不滅なる涅槃の境地に到達している。…〔ある時に弟子サーリブッタは遊行者ジャンブカーダカに釈尊の涅槃觀をこう説明した。〕…友よ、貪欲の滅、嗔恚の滅、愚癡の滅、これが「涅槃」と言われる。…聖なる八支の道（八正道）こそは涅槃を作証するためのものである。…〔又、夜叉女は釈尊の教示を自分の子にこう伝えている。〕わが子よ、…世尊はのたまえり。「涅槃はあらゆる繫縛より解脱することなり」と…（涅槃は）苦に悩まされ、老・病にまつわれるこの世において老死の解脱のために証したもうた法である。…〔又、別の時に釈尊はこう語った。〕「いかなる所有もなく、取著もなく、比類のないこの庇護處、老衰と死とが全くなくなった状態、それを〔無餘依の〕涅槃とわれは言う」と。…もし比丘あって、彼が老死を厭離し、離貪し、止滅し、取著することなく解脱しているならば、これを「現法涅槃」〔有餘依涅槃〕に達した比丘』と云うに相應しい、と』（「阿含経」、教説、4）⁽⁶⁾。

釈尊は人生最後の旅時にあたり、パークリ村の在家信徒に有名な「五禍五福」という説法の中で禍福の死についてこう力説する。

『家主たちよ、（仏教の）戒を犯した破戒者は昏迷して死んでゆく。これが戒を犯したことによる破戒者の第四の禍いである。更に又、家主たちよ、戒を犯した破戒者は身体が壊れて死んで後、苦處・悪趣・劍難處（又は）地獄に生じる。これが戒を犯したことによる破戒者の第五の禍いである。…さらに又、家主たちよ、（仏教の）戒を具足した持戒者は昏迷しないで死んでゆく。これが戒を具足した持戒者の第四の利益〔福〕である。更にまた、…戒を具足した持戒者は身体が壊れて死んで後、善趣、天界に生まれる。これが戒を具足したことによる持戒者の第五の利益である』（「阿含経」、仏伝、30）⁽⁷⁾。

同じ旅途中に釈尊の一行がベールヴァ村に着いて後、雨季の安居と呼ばれる坐禪修行の期間に入って間もなく釈尊を一時的な激痛が襲った。經典はこれをこう伝えている。

『（世尊には）恐ろしい病いが生じ、死ぬほどの激痛が起こった。しかし世尊は正念・正知であられて、苦痛に悩害されることなく忍受したもうた。…世尊は努力によってかの病いを耐え忍び、寿命を留めて住したもうた。時に世尊の病いは止息してしまった』（「阿含経」、仏伝、31）⁽⁸⁾。

パーヴァー市に生計を営んでいた鍛冶屋工の子チュンダは釈尊とその弟子達のために食事を作り、

彼らを手厚くもてなしたが、世尊は食中毒でたおれ、数週間後にこの世を去ったのである。このことはこう伝えられている。

『はげしい病いが起こり、死ぬほどのはげしい赤痢の苦痛が生じた。しかし世尊は正念・正知であられて、苦痛に悩害されることなく忍受したもうた』（「阿含経」、同上）⁽⁹⁾。

そして、仏典は現世における釈尊の最後をこう語る。

『釈尊は比丘たちに話された。「いざ、比丘たちよ、お前たちに告げよう。諸行は壊れる性質のものである。たゆまず〔修行〕に努力せよ」と。これが如来の最後の言葉であった。…世尊は般涅槃に入りたもうた時、般涅槃と共に大地震があった。（人々は）恐怖し身の毛がよだち、また天鼓が鳴り響いた。世尊は般涅槃に入りたもうた時、その大いなる死と共に娑婆世界の主たる梵天はこの詩偈を語った。「世間における生あるものすべてはついには身体を捨てるであろう。…諸行は実に無常〔一回限りのもの〕であって、生滅の〔自〕性を持つものである。生じては又滅する。それら（の諸行の）寂滅は〔般涅槃の〕楽である』（「阿含経」、仏伝、31）⁽¹⁰⁾。

さらに、「阿含経」の教説篇によると、釈迦牟尼仏の死を直視した弟子アヌルッダハは世尊の般涅槃入りに際してこういう頌をよんだ。

『動著なき人は寂靜を得て、
牟尼〔の身〕は滅したもうた。
不動の心をもってよく苦痛に堪えたまい、
燈火の滅するが如くに心の解脱はあった』
(同上、教説、4.5)⁽¹¹⁾。

お釈迦様はこの世で生きていた時に自分の開悟、特に自他の生死苦楽等の輪廻とその内実に関して不退転の慧智を獲得した。世尊は世間の見方とその唯物的な知識と価値観ではなく、仏眼をもって自分自身の諸前生と無餘依涅槃を初め万代衆生の死後の「中有」とその輪廻転生を観る。つまり人間他の衆生の死、彼らの前生諸行の果報的な完熟、新しい転生様態の改悪的や改善的な変成と完備、新しい世界への生まれ変わり、その貴賤的・美醜的と善悪的な性向を有する存在様態とその境遇を観て人甞の目的とその禍福的な運命に関して不退転の慧智を得た。彼はそれについてこう語った。

『比丘たちよ、この私はおのれ自身、生まれ老い病み死ぬ性質のものであり、又悲しみあり汚れある性質のものである。しかし、生まれ老い病み死ぬ性質のものについて、又悲しみあり汚れある性質のものについて、その患いを知って、生まれたものでもなく老いたものでもなく病いもなく死ぬこともなく悲しみもなく汚れもないこの上ない安らかな涅槃を求め、…〔その現法の〕涅槃に到達した。そして、「私の心の解脱は不動である。これは最後の出生であって、もう〔この現象界において〕再び生存をくりかえすことは無い」という知見が私に生じたのである。…このように心が静かに定まっており、清浄で、汚れなく穢れなく、柔軟で軽快で、安定しており動揺がない。ある時に私は心を〔自分の〕前生の生涯を憶い見る知恵に向けた。私は種々様々な前

生の生涯を、そのいちいちのありさまや細かい事情をも併せて憶い出した。…無知は消えて智が生じ、病みは消えて光が生じた。それは安逸に流れずに熱心に努力している者の上にもまさにそのように生ずるのである。〔更に又、〕私は心〔つまり仏心眼、正覚眼又は正法眼〕を衆生の生死を知る智慧に向けた。私は清らかで常人のものを超えた天眼をもって諸々の衆生の死しつつある者、生まれつつある者を見た。諸々の衆生が各々の業に従って、卑賤な者となりあるいは高貴な者となり、美しい者となりあるいは醜い者となり、よい境涯へあるいは悪い境涯へ行くのを私は知った。…無知は消えて智が生じ、病みは消えて光が生じた』(「阿含経」、仏伝、II)⁽¹²⁾。

一方、釈迦牟尼仏の教行信証、特にその「見仏慈人」(又は「敬仏慈人」)の心に通じた聖哲の多くは世尊が死ぬ時に完全な解脱の境遇、つまり無餘依涅槃を獲得したが、生きとし生ける諸存在への大慈悲心の故に極楽浄土に入らないと自ら選定したと主張する。そして、世尊は今天上界におられ、天人たちに仏法を説き、彼らを済度していると教示している。例えば、道元禅師は『正法眼蔵』の「行仏威儀」という巻の中でこのことをこう説示する。

『ある祖師は「釈尊は迦葉仏に正しい教えを伝え授けて、兜率天の世界に行って、そこにいる天人らを教化し、今もそこにおられる」と』⁽¹³⁾。

2. 初代仏教による死と死後界の理解

釈尊の大悟とその伝道生活の第一の目的が言うまでもなく人の済度、取り分け「人衆諸苦の全滅と超脱の道を示す」事であった。釈尊の死から四・五百年が経過し、彼が示した大衆済度の精神への回帰運動は興ったのである。この運動は「大乘仏教」と呼ばれ、釈尊正伝の主流として中央と東アジアの文化の原動力となったのである。この大乘が唱道し主張するところによると、万代万人にとって一番大切な事とは人衆を正しく理解し慈善的に生きる(修証)ことである。その中で言うまでもなく、「死」と「死後」の運命の正しい理解は極めて重要である。以下、日本大乘仏教の最盛期に活躍し、日本精神文化の心を形成した鎌倉時代の高僧達、特に親鸞聖人と道元禅師に著しい影響を与えた『無量寿経』、『涅槃経』と『阿閼仏国経』が教示する死観と死後観に焦点を絞り、明解で意味深い文のみを引用し解釈を施す事に留める。

一世紀中に書かれた『無量寿経』の中で阿難陀や弥勒を前にして釈尊は先ず阿弥陀仏の本然徳力とその光明の無量無限性、一切劫界の衆生を救うために阿弥陀仏が誓った本願とその効力、そして阿弥陀の国に往生するための生き方を教示する。さらに、我々の最大関心事である極楽浄土の風光、そこに生まれ変わった者達の心身徳力、その活現の栄光、又仏土の真理を軽んじ、浄土への往生を願わず、阿弥陀の教えに逆らって生きる人々の哀れな来生を指摘し、戒めの言葉を発する。釈尊はこう説く。

『阿難よ、かの世尊、阿弥陀仏の極楽国土は豊かに繁栄し、豊満であり、平和であり、豊饒であり、静寂であり、華麗である。そこでは多くの人々が安穏な生活を送っている。この世界には

地獄がなく、畜生や餓鬼の境地がなく、阿修羅の体をもつ者も教えを聞くことのできない不遇な生を受ける者たちもない理想の世界である。そして、その世界で見られる様々な宝玉はこの世においては一切存在しないものばかりである。すべての業が浄められたかの仏の国土は清浄にして、楽しく安らかで、しかも単なる形状を超えて〔生死万苦の〕寂滅無為の涅槃の境界そのものである。その国土における諸々の声聞・菩薩・天・人たちはみな智恵高く、神通自在、優劣の差別なく、したがって容姿もみな一様である。天人といった名称があるのも、しばらく他の世界のそれになぞらえたに過ぎない。顔…姿の美しい事は世に超えて比類なく、みなこれ、さとり身を受けているが故に、一切の〔現象界の〕有無を離れた自然虚無〔極めて清浄、精妙で光妙な〕身であり、無極の体そのものである。…阿難よ、かの阿弥陀仏の国土には〔無量の生命力、豊饒、正覚、善美、栄光と威厳を示現する〕多くの蓮華が至る所に咲き充ち充ちている。それらの一々の花には百千億の花弁があり、その放つ光には種々無量の色彩が見られる。…さらにそれらの一々の花から三十六百千億の光が放たれ、その限らない光の一々の中から三十六百千億という無数の御仏〔つまり無上正覚の境遇を獲得した者〕が出現されるのである。…これらの諸仏は又それぞれ百千の光明を放って、広く十方世界の衆生のために微妙の教えを説き、量りなき人々をして〔無量無尽にして絶妙で絶美の極まりない徳力性能を本有する御〕仏の正しい道に導き、落ちつかしめたもうのである』(「無量寿経」, 10)⁽¹⁴⁾。

別の折に同経は極楽浄土に住む者達の至福的境涯とその徳力性能について語る釈尊の言葉をこう伝えている。

『阿難よ、かの国土に生まれ(変わっ)たすべての求道者たちはみんなその身に優れた三十二の徳相を具え、円満な身体と安定した精神をもって、神通力に熟達している。又、…真実の底を窮め尽し、あらゆる知識を完全に受容することが可能である。…また(この国の住民は)すべて菩薩の最高位であり、…決してこの悪世界に戻ることがない。…自他の過去の生を正しく知り、…〔彼らの諸活現も〕想いに任せて自由であり、…自他の知識への隔てがなく、競ったり争ったり、(又)訴えたりすることもない。彼らは平等な心を持ち、他人を思いやる愛情の溢れる優しい心を持ち、…怒り恨む想いなど少しも存在しない。…(更に、彼らは皆)高尚な心、甚深な心、禅定の心、それに真理を愛し、…最高の智恵の完成のため、堅固な意志のもと、菩薩の修行〔無我利他的な敬仏慈人〕を實踐しておられる。このように、一切の迷い〔迷信邪道、拒仏拒慈、私利私欲、自己中心等の如き俗界的な価値〕の心を断ったその世界は苦悪の世界を遠く隔てており、様々な悩み煩いのかげなど微塵もそこには見られない。…彼らは幾千万、百万、十方という無量の諸仏の御もとで貪り、怒りや愚癡のさわりを滅して心に歓喜を具現し、…世間をよく知る力、宿世を記憶する力、…種々の神通力、…常に〔仏道の普遍的で〕永遠の法に専念し精励する。…彼らは無量の諸仏如来を尊敬し、…実〔つまり現象界に見られるような物質的で固定〕の身なく、実〔つまり現世〕の相もない。従って、彼らの外物を求めて起滅する我が想いもないと観じ、さらに滅することも生ずることもなく、永遠不変に遍満して存在する真理の、本来の静けさに心を浸する。…私(釈迦牟尼仏)は今そなたの為にその〔素晴らしい国の〕一片を説いたに過ぎない』

〔無量寿経〕, 15)⁽¹⁵⁾.

更に、別の時に釈尊は弥勒を前にして、仏道を軽んじたり敬仏慈人の道に逆らい悪道を歩んでいる人々に次のような誡めを發する。

『弥勒よ、かの仏の安樂浄土に生まれ(変わ)るならば、直ちに五つの悪世界に至る通路は遮断され、その門戸は自然に閉じられて、窮まりなく仏の道の高さに昇り、無上の涅槃を得ることが出来るであろう。しかしながら、この国へは行き易くして(そこに)生まれる人は実に希である。その国は、…信を抱く人々を仏の願力のままに自然に迎えとって下さる。それなのに世の人々は どうして、…先ずさとり道の道を求める努力をしないのであろうか。何故に仏の国に生まれて限らない命を得、永遠の平安を楽しもうとはしないのであろうか。弥勒よ、世間の人々は真に浮薄であって、…あくなき闘争の世界にあって劇しい罪惡にさいなまれ、…尊卑・貴賤・貧富・老若・男女と智愚の区別なく、皆金銭や財宝のことに憂い苦しみ、…心の安まる時がなく、不安の余りうろたえ、…空しく自らを浪費している。人は愛欲〔偏愛、渴愛、熱愛、密愛、溺愛等の自己中心的な「愛着」〕の世界に独り生まれ、独り死に、独り去り、独り来る。もとより善と悪とは自己の行業の自然の結果であって、全ての行為に相應しい、〔正善と邪惡の自然で必然的な〕結果として現れる。善は幸福を、悪は不幸をもたらすことは明らかな因果の道理であろう。未来〔の存在様態〕に趣くべき苦や樂の境界も、自らの行為に相当して定められ、誰も代る人は一人としていない。…世の人々は、なぜ…この濁惡の土を去ってかの清浄の土において限らない命を得て、安樂の生を迎えようとはしないのか』(〔無量寿経〕, 16)⁽¹⁶⁾。

幾多の編集段階を経て、四世紀の中頃に今の文体を得た『涅槃経』は御釈迦様がクシナハラの村で死を迎える前に出家と在家の弟子達のために成道〔つまり仏道成就〕の心髓を説篤する。釈尊は本経の中で、人間を含む一切現象界の在りとあらゆる存在は悉く、仏命〔つまり無限無尽の御命〕の個性的な活現であると教示する。そして、「仏」様という「現実」が万我事象とその万変千化を通総しながらそれを超絶する永遠無限の真実であり、無限無尽にして万徳性能の極まり無い**御命として変化が一切ない**〔「一切衆生、悉有仏性、如来常住、無有變易」〕と明示する。この真理を土台に仏道、特に涅槃の光明とその獲得を説くのである。本経の中で、世尊は人誰もが、「一闍提」と称ぜられる極めて救い難く兇惡極道の者でさえ、本音で惡を断じ善を行なう心を發するならば成仏、つまり浄土における自己完成の境遇を得る事が出来ると明言する。しかし、一闍提が「何時かが必ず成仏する」という意味ではなく、「努力すれば成仏出来る」という意味である。ここで我々の最大関心事である「菩薩」と「一闍提」の違い、一闍提という者の精神状態と境遇、更にその改心と解脱の不可不可に関する本経の最重要な文のみを引用する。

『善男子よ、…一闍提という輩は、…すべての善に対しての根本となるものを断滅し、…菩提〔正しい悟り〕の根芽を生ずるということは全く不可能なのである。…五無間罪だとか、四重禁のものなどという一闍提以外のものの濁水中に置いた場合は、その心を澄清にし菩提心を發せし

めることが出来る。しかし、これを一闍提という淤泥の中に投じた場合は百千万年経ったとしてもその心を清くして菩提心を発せしめる事は出来ない。…なせる業を見ぬ者は一闍提のことである。なせる諸々の悪きことを自らそれを悪と認めぬ。これを一闍提の傲慢心の故である。多くの悪をなしながらそのことに些かも怖れを持たぬ。…善男子よ、…かの一闍提が成仏するという事だけはあり得ない。…菩薩は己のなせる善業をもって仏道に回向する時、一闍提の輩が誇り破って信じないであろうとも、なお彼に施与して彼と共に仏道を成じたいと望む。…善男子よ、一闍提が阿羅漢〔大悟の高僧の如き〕像をして空処で方等大乗經典を誹謗することがある。凡夫（世間の人々）たちはそれを見てみな真の阿羅漢であり、大菩薩であると思う。…一闍提のみは仏性はあれども無量の罪垢にまともわれているために、そこから脱出することが出来ぬ。あたかも蚕が繭の中にいるごとくである。…（一闍提は）生死に流転しやむ時がない。…善男子よ、最愛の子どもが死ねば父母は歎き悲しんで共に自分も死のうと思う。菩薩も同様である。一闍提不信の者が地獄へ墜ちるのを見ると、自分も共に地獄の中へ生まれようと思う。…菩薩は、…人々が地獄・畜生・餓鬼に墜している時も、人天〔とも呼ばれる人間界と天上界〕の中で善悪の行をしている時も、常にそれを心にとめて少しも忘れる時はない』（『涅槃経』、18と39）⁽¹⁷⁾。

紀元二世紀から八世紀までの間に書き上げられた『阿閼しやく仏国経』は仏土天上界の最高界と見なされ、極楽浄土の一つ手前にある阿閼仏国の光景、慶福の環境と形状、その主権者たる阿閼菩薩の誓願、無量の徳力、最後の死と無限無尽の永福世界である般涅槃（極楽浄土）への生まれ変わりを説く。更に、阿閼菩薩の国に往生した人々の境遇、環境とそこに生まれ変わるための生き方を教示するのである。その教示の心髄を経文を用いて以下に記す。

『（阿閼仏の）国には三種の悪しき境涯の衆生——すなわち地獄・餓鬼と畜生と——は存在しない。そこではすべての衆生が皆善にいそむのである。…かの国には三つの悪しき病、三つの煩惱も存在しない。…女性も皆他に比類のない美しさを具え、互いに嫉妬の心をもたぬ。人々のとる食物は色・香り・味とも如何なる天の世界の食物も及ばない。この国には王や統治者もなく、ただ〔仏〕法の王たる阿閼仏がましますのみである。…この国の人々はそれぞれが農・商などの業務に従事することなく、…至る所に阿閼仏の光明がみなぎって、自ずから輝き互っており、人々はその光の中に安んじている。…阿閼仏の国には出家の弟子たちも在家・出家の菩薩たちも数かぎりがない…預流の人々も一來の人々も不還の人々も、さらに迷いの生死を重ねることはなくて、皆その生涯の内に煩惱を断ち尽すこと阿羅漢と同様である。…かの国には悪い行為に走る者はいないからこの世界においてのような罪もない。…短命な人…悪徳の人…社会悪…邪な思想…思い上がりや高慢な人…よこしまな欲望や五つの逆罪もない。…阿閼仏の国の出家・在家の菩薩たちも又百万億の数を持って数えられる。…彼ら皆は仏道の修行において不退転の者となり、如来のくら（無上の悟界）に入り、無畏の城に入る（確固たる正信を得る）。…彼らは悪魔に心をかき乱されることもない。…阿閼仏が般涅槃されようとする時になると（その国の）大地は震動し、その音響は全宇宙にひろがって天地の間に響きわたる。…阿閼仏がその御身から火を出して自らをだびに付けさせる時、ご遺体は金色に輝く。ご遺骨は自ら細かに碎けて、やがて見えなく

なるであろう。…阿閼仏が般涅槃された後も、…かの国の様素は仏の在世の時と変わることがない。…〔我々も阿閼仏の国に往生したければ〕阿閼仏が修行された行為を学んで自らもそのように菩薩の行為を修し、仏の国に生まれようと言う願いを起こすがよい。…六波羅密の行を修め、…三昧〔つまり無上正覚〕の修行を学び、…善根を積んでその功徳をすべての衆生と共に無上の悟りに至ることのために廻し向けるとするならば、尚さらのことである。…仏道の修行において不退転でありたい者はこの教説をほめ讃え、受け保つが良い』（「阿閼仏国経」、2-5）⁽¹⁸⁾。

三世紀末に中国で漢訳された『修行道地経』が修行者の禅修行の過程、死、死後の形状、輪廻転生の経過とその状況を説示し、各人生前の正邪善悪の諸行、死後の禍福的輪廻の境涯とそれを主導する自然で必然的な「業報法」の道理を論述する。又、七世紀の半ばごろ玄奘によって訳された『阿毘達磨大毘婆沙論』が人間的自己の中有中の形状とその諸能力をかなり詳しく説述する。そして、玄奘が漢訳した『仏説無常経』、特にその後半である「臨終方訣」という巻は福死の準備、死後慶福の生前的因縁とその心得を知るために貴重な經典である。さらに、十世紀末に比叡山の僧侶源信は数多い仏典の文を用いて有名な『往生要集』を編輯したのである。この書物は正伝大乘が一貫して信教して来た人衆の禍福的運命、特に万人存在の至福的目的である「極楽浄土への往生」と現世今生における各人諸行との自然で必然的、つまり因果的で業報的な関係を明示する仏道教理の**日本的な眼精であり、福死準備の貴重な手引きであり、禍福的な往生獲得の是非を論究する玉冊である**。仏道教理の中に禍福的な死、死直後の中有期と生まれ変わり、又は浄土への往生に関する『往生要集』の教示の心髄を以下にまとめる⁽¹⁹⁾。

- 一. 人間的妙我の輪廻六道の内に「地獄」が認められ、特に「無間地獄」を明記し、その実相とそこに居る住民の禍苦的形狀と彼らの生前諸悪について語る。
- 二. 輪廻六道を超脱する極楽浄土の十楽、その諸相、その住民の素晴らしい形状、高貴で至福的な境遇と万徳性能の不思議について語る。
- 三. 生きる間勿論のこと、死ぬ直前の真懺悔の効果とその功徳についてかなり詳しく説明する。例えば、『もし罪を覆せば罪則ち増長す。発露懺悔すれば罪即ち消滅す』（『往生要集』、上巻の「懺悔衆罪」章）という確信も述べられている。
- 四. 人の臨終行儀、特に現世的な人生から来生への移行の準備とその道程を示し、死時念仏の心構えとその効果を明らかにする。
- 五. 真信を土台とする死時の専修念仏の利益として今生罪報の減少、善報の増加、来生形状の改善と見仏眼の強化が挙げられている。更に、過去の生に悪趣の道を歩んだ者も死時念仏によって浄土往生の道に近づき、往生を早めることも出来るという深信が述べられている。
- 六. 凶悪の者が阿弥陀の国に往生出来ると説いているが、それは「100%で確実に何時かが往生する」という意味ではない。正伝仏道の頭初からの通念に従って『往生要集』は、『逆罪を造り、また（仏）法を謗りし者は往生することを得ず、…五逆の定業を造れる者は往生せず』と明示する（下巻の「臨終の念相」章。『阿含経』、「教説」、2.10も参照）。

仏道広伝を背景に日本の正伝仏教は人間一人一人の諸前生と今生の迷悟的と善悪的な諸行を因縁とする人格的妙現（人格的自己）の中有中の熟成経過，来生（死後界）の新徳力，その諸性能と禍福的な形状の創生，そして，六趣界の性質と各界の環境を論述する。先ほど詳説した向上的で慶福的な輪廻転生や極楽浄土への往生と違って，今度は人格的妙我の劣化，卑賤的な形状，悲惨的な境遇，悪趣的な新性向，とその環境に日本の正伝仏教の眼精を当てその教示の心髓を以下に紹介する。

『〔個性的な人格精神と身体をして生きる仏命の妙我は〕惑によりて業を造り，業によりて苦を招き，…永く生死を免るゝことを得ず，過去の業因によりて未来の果を受け，地獄，餓鬼，畜生，修羅，人間，天上の六趣〔一切の現象界における万我物事象の根本形状と環境〕に輪廻す。地獄は極悪の衆生の趣く所である。…地獄の中最も苦しきを無間地獄とす。常に無量の苦を受け，熱鉄を食ひ，悪臭を嗅ぎ，骨肉は挫かれ，…その壽亦長くして苦悩を受くること億万年に達す。次ぎを極熱地獄，極寒地獄，大叫喚地獄，叫喚地獄，衆合地獄，黒繩地獄，等活地獄とし，之を八大地獄といひ。此八大地獄各に十六の近辺地獄ありて其の数百二十八，之に八大地獄を加へて百三十六（となる）。罪の軽重によりて赴く所異なる。…日月の光を見ざる所に餓鬼界あり，慳貪の念盛なる徒の趣く所とす。畜生界は「辨意長者經」によれば，戒を犯して竊かに偷盗し又は債を負て償はず，殺生して相争ひ瞋恚の心止むなき者の趣く所とす。此三を三悪道といふ。次ぎに阿修羅，…人間，…天上界あり。…天上界には諸種の段階ありて，欲界（持国天・度目天・増長天・多聞天・惱利天・夜摩天・兜率天・化樂天・他化自在天と三十六の他天），色界（梵衆天・梵輔天・大梵天・小光天・無量光天・光音天・少淨天・無量淨天・偏淨天・福愛天・福果天・無想天・無煩天・無熱天・善見天・色究竟天），無色天（空虛天・識虛天・無所有天・非想非々想虛天）の別あり。欲界は他の五道（人間界・修羅界・畜生界・餓鬼界・地獄）と共に未だ欲情の全く失はれざるものにして，色界は己に此欲なしといへども尚ほ肉体の繫縛なしとす。…〔それらの諸界も〕未だ生死輪廻を免れざるものなり，之を免るゝには〔諸現象界の〕灰身滅智の涅槃の境に到らざるべからず。…之れに行く方法として八正道を説く』⁽²⁰⁾。

3. 道元禅師による死と死後界の理解

日本仏教が生んだ最高の聖哲，道元禅師は仏典の通徹と仏道の終生誠実な身心辨道を基に人死の意義，取り分けその価値，禍福的な性向と死後の進路を『正法眼蔵』の中で様々な見地から巧みに論篤する。それらの事柄を既に『禅仏教による人死の禍福的運命』という章⁽²¹⁾の中で詳解したが，ここで再度，人間の死，死後の「中有」，来生禍福の完熟とその主因に焦点を合わせて，禅師の心地を一層明確にしたい。先ず，既説した道元の人死観，特に仏命の人格的妙我，その死，中有と来生の禍福的な境遇及びその形状に関する禅師の独創的な見解を下記のごとくまとめる。

- 一．人格的な身心一体として生き，苦楽と老死を体験する仏命の個性的妙現たる人は仏命の個現である以上，始めもあり終わりもあり，限界がある。つまり，「仏命の妙現」は人として生

まれ、活動し、苦楽を味わった後必ず死ぬ。そして又、例えば、天人として生まれ変わり、…そして又死ぬ。一方、銀河群も微粒子も、単細胞の生き物も人も無始無尽の仏命を生きる個現である以上、その生命の実質徳力の一部を本有する。そういう意味で幾ら進化や退化したとしても仏命の永遠不滅性に参加し、絶無化不可能の存在であると言える。

- 二. 仏命の人格的で個性的な妙現である人はその個性的な人格の範囲において自由な思考力・自由意志・自由な決断力とそれに遵ずる内外的な活動力を本来の徳力とすることによって迷悟的、苦樂的、善悪的や進退的——即ち「禍福的な性向」を本有し、それを実現することが出来る。さらに、我々一人一人は、他の万我物と同様に**仏命活現の普遍的な秩序の世界内**にしか生死苦樂等を生きる以外はないので当然仏命界の普遍的な諸道理、特に**因果律と業報法の効力範囲**から一瞬一寸も出られない。よって、各自の人間は自由な決行をもってそれらの道理に従って生きるか、それともそれらの道理を無視して生きるかによって自分の今生と来生の禍福的な形状と境涯を**自らの手で「活動の因果律と業報法」**の内に自然で必然的に造り上げている運命を背負っている。にも拘らずこの世において、人格的妙現は敬仏慈人に順従する来生、又は拒仏拒慈に順従する来生へ趣いて生きる能力と自由があるが、当然自由な決行には何時も自然で必然的に自己責任が伴うのである（自業自得）。
- 三. 道元によると、『このいのちを終えて、次ぎの世に生まれる間の中有ということがある。…この時は、何を見たり聞いたりしても天眼の如く（純粹な身心であるから）、このような状態の時、心を励まして三宝を敬信し、南無歸依仏、南無歸依法、南無歸依僧〔永遠無限の仏、釈尊の教えと信仰共同体に歸依すること〕と唱え奉らんことを忘れず、寸暇も休みなく唱え奉るべきである』（「道心」の巻）。そして、この一文だけではなく正法眼蔵の多くの巻、特に「行仏威儀」、「行持下」、「全機」、「遍參」、「三時業」、「深信因果」と「出家功德」という巻は、人をして生きる仏命の妙我が死後の中有中に自他、善悪、真信や邪信の認識、識別力と改心力を持っていることを明示する。
- 四. 「中有」とは仏命の人格的妙現（人格的妙我、人格的自己とも称ずるもの）が死ぬ時に身体と離別した瞬間から次生を受けるまでの期間と妙我の存在形態のことである。この期間中に人間的な身心を離れた人格的妙現の生前諸行が熟成し、その業果が完熟し、当妙現の新自性、その徳力性能及び新しい存在の形状と境遇の性向も「因果業報法」に遵従して新創されるのである。人をして生きた妙我は生前等中に敬仏慈人の悟善を行なったならばその来生の性質徳力、諸性能と性向が向上的に変成され、存在新境遇の悟智的、善美的で幸福的な輝きも増大される（善因善果、善業善報）。しかし、もし妙我は愚痴、自己本位と拒仏拒慈的な生き方を遂行するならばその次生の形態と境遇等の性向も自然で必然的に改悪化され、禍賤的に劣化されるのである（邪因邪果、邪業邪報）。
- 五. 前生の悪行に順応して賤劣的に形成された妙我は修羅界、動物界、餓鬼界や各種の地獄界内に適した新身心を受容して生まれ変わり、新たな存在様態とその境遇をもって正善や邪悪の生き方によって完全な成仏（般涅槃、無餘依解脱）に近付いたり又は遠ざかったりするるのである。一方、前生の敬仏慈人の生き方に遵応して向上的に形成された妙我は天上界内に適し

た新しい身心を受け、素晴らしい徳力とその性能を活用しながら輪廻転生界からの脱出を目指して励むであろう。さらに、終生誠実で真善智の教行信証の道に励んで現世を生きた人格的な妙現は輪廻転生の世界を脱出し、新たに創生された善美的で慶福的な自性の万徳性能を無量劫を通じて不退転に増強し、自らの栄光とその慶福を向上しながらその極楽を享受するであろう。

万代万人の一大事と見なし、生涯を通じて全身全霊をあげて自他の人甞と死後の真慶福を目指して生きた道元禅師は、特に人生の夕焼けに弟子達を初めすべての人々に切に訴えた永福の生き方を示す彼自身の最重要な教説の一部を以下をもって紹介する。

先ず、道元は富裕、金銭、名利、権力や珍宝を人生正道の最高の価値として考え仰ぐ人々にそれらのものの幻泡性、虚妄性、空白性と無常性を示し、皆が必ず直面し体験しなければならない死とその嵐の実境を「出家功德」巻の中でこう語る。

『仏法は優曇華〔四千年に一度だけ開華する伝説の樹〕の如く、中々遭い難い。全て無常の嵐が吹く時は、国王でも大臣でも、いかに親しい者でも、天下の珍宝であっても、死の道連れにする訳にはいかぬ。ただ己れ一人死の国に赴くのみである。ただ己れが連れてゆくものは生前の善悪正邪の行いのみである。いざ死に直面した時、初めてこの生命の貴いこと、得難きことを悟り、惜しむであろうが、今それを思つて、生命のある中に出家す〔誠意全霊を尽くして絶えず断悪奉善に励む〕べきである』(「出家功德」巻)⁽²²⁾。

死は昔も今も精神教養の低い人々、特に拒神拒仏主義者、快樂主義者、弱者を搾取する者達、名利貪欲主義者と億万長者にとって人の終末として忌み嫌われ、怖がれている。彼らは博愛善者と最先端の科学者の「顔」をして自分の寿命を少しでも延長するため無防備の者のいのちでさえ平気で抹殺したり、人間の受精卵を臓器製造の材料としたりする偽善者である。道元は自他生死の平等、聖性と高貴を数千語句で語るが、ここで一例として下記の引用に留まる。

『生死の中に仏あれば生死なし。又云く、生死の中に仏なければ生死にまどはず。…生死をはなれんとおもはん人、まさにこのむねをあきらむべし。もし人、生死のほかにも仏をもとむれば、ながえを北にして越におかい、おもてを南にして北斗をみんとするがごとし。…生死すなはち涅槃と心得て、生死としていとふべきもなく、涅槃として願うべきもなし。…この生死は、即ち仏の御いのち也。…〔生も死も〕いとふことなく、したふことなき、この時はじめて仏の心にいる。…ただ我が身をも心をもはなちわすれて、仏の家になげいれて、仏のかたよりおこなはれて、これにしたがひもてゆく時、力をもいれず、心をもついやさずして、生死〔輪廻転生〕をはなれ、仏となる〔成仏する〕。…仏となるにいとやすき道あり、諸々の悪をつくらず、生死に著する心なく、一切衆生のためにあはれみ深くあれ〔諸悪莫作、衆善行奉行〕』(「生死」巻)⁽²³⁾。

『無言に徹した古仏の語に、「死の中には活がある。活の中に死がある。死の中に死がある。活の中に活がある」と。これは人がことさら、このようにさせるのではなく、物事のあり方自体で

あり、仏法〔仏命の普遍の活現成〕の真実の「すがた」がこれである』(「唯仏与仏」の巻)⁽²⁴⁾。

更に、道元禅師によると、この人格的妙現は生きる人体でなければ人体に遍在するモノでもない。又、彼は人が死んだ後で、たまに『人心』と(「遍参」巻の中で)呼ばれるこの妙我は人屍内に残存したり壊滅したりする事と言わなければ、「死心」や「死我」に変成したり、「屍心」や「心屍」もしくは「屍我」に転成したりするということも言わない。更に、この妙現は人屍の如く、万変千化を繰り返しながら徐々に解体し、その挙げ句に100%のゼロ(絶無)に転じたりするということも言わない。道元は人が死ぬ時にその『人心が人体に留まらない』と主張し、『生者は必ず滅すると考えるのは浅はかな見方である。死者は知覚を持たないと考えるのも〔仏道教理の〕あさはかな理解である』と明示する。道元は人が死ぬ時に、本来、人の真自己である仏命の無定相的で無定格的な妙現が自分の「人格性と人相性」を脱ぎ捨てるが、その後も自他の存在、その境遇、生仏真理の邪正、生前諸行の善悪性の認識を保ったままで中有へ赴く。中有中に前生諸行の果報が完熟した結果、つまり次生の新我性とその境遇が設定された結果として慶福的な生まれ変わりの場合は、その生まれ変わる先をも意識していると説くのである。禅師は「行持下」と「遍参」という巻の中でこれらの事についてこう述べている。

『生者は必ず滅すると考えるのは浅はかな見方である。死者は知覚を持たないと考えるのは〔仏道教理の〕あさはかな理解である。仏道を学ぶにあたっては、このような小さな理解や小さな見方をまねてはならない。生者に死のないこともあり、滅者に知覚のあることもあるはずである』(「行持下」)⁽²⁵⁾。

『人が死する時、〔人の真自己である〕心は〔人屍内に〕留まらない。死の時に全死であるからである。この故に、全人は心である。全心は人であることが出来るのである。心と人とは別々の存在ではないのである。一つのもの〔つまり、人格的な身心をして生きる仏命の妙現〕である。このように全心と全人の表裏、全有〔限の劫界〕と全無〔限の劫界〕の表裏、全死と全生等の表裏を徹底的に参究しなければならない』(「遍参」)⁽²⁶⁾。

仏教徒であろうとなかろうと関係なく、人をして生きるすべての妙我は死んだ後に「中有」を通行しなければならない。そして、この中有中に妙我の好き嫌い、是認否認、境遇の貴賤や生前の身分、貧富や地位と関係なく、妙我の新自性の徳力性能、存在的な様態の形状とその境遇への新趨向が創生され設定されるのである。さらに、釈尊を初め仏道の諸聖哲によると、中有における人格的妙現の再変成、その次生境涯の貴賤と禍福は人我の諸前生の生き方と密接で不可離的な関係があつて、皆が何時かが必ず成仏の永福を得るのではなく、永劫を通じて無間地獄で転生を繰り返す極悪者もいるという真理をも明示する。

道元も大乘の大聖哲と同じように、人我今生の迷悟的で善悪的な生き方、中有中の貴賤的な再変成と人我次生の禍福的な境遇との自然で必然的な依存関係を、絶対的仏命の本然自性の一性能でありながらその普遍的な活現成の原理であり、宇宙万物の生成・化育と千化秩序の道理であつて人間の諸活現とその秩序の根本道理でもある「因果業報」の普遍性、歴然たる不転倒性、不偏性と公

正性で裏付けて証明し、疑念なく是認するのである。禅師はこれらの哲理をかくの如く力説する。

『この現在の生命のある期間から、死んでから〔新〕生命を得る期間（中有）を経て、また〔来る〕現実の生命のある時期に至るまで、みな一瞬一瞬に移って行くのである。このようにして、自分がそう願うのではないが、人の〔前生の諸〕行為によってもたらされる必然の影響〔つまり自然で必然的に働く因果力〕に支配されて移り変わり、生き、死ぬことは一瞬間も停止することはない。このように、生死流転の我らの身心を省みて直ちに自ら覚りの彼岸へ渡るより先に、他〔の人々〕を渡らそうとする菩提心を起こすがよい』（「発菩提心」）。

『（鳩摩羅多尊者は言った：）すべて善悪の報いには過去・現在・未来の三時がある。…悪い者が不幸となり、善い者が幸福となるという因果の道理はあるものではない、という考えは大きな誤りである。因果の道理は形に影が、音に響が〔自然で必然的に〕相従うように少しも違うことなく、しかも〔因果業報の道理を排斥する者が〕百千万億年を経てもこの真理は磨滅しないことを知らないからだ、と。…「善悪の報いに三時あり」とは、第一には順現報受（現世今生の善悪の果報を現世今生中に受ける）、第二には順次生受（現世今生の諸行の果報を次生中に受ける）、第三には順後次受（現世今生の善悪の果報を次生後）に受ける、これを三時というのである。…もし人が現世において五無間業（つまり、父母の殺害、正覚者の殺害、無実で無防備の生き物の多量無差別〔仏身〕の殺傷、信仰共同体の破壊という五逆罪の内から一つ）を行なったならば、次ぎの生において必ず無間地獄に墜ちる〔が、そこにも罪悪の軽重に遵応する地獄の多種がある〕のである。…この五無間業（又は無間地獄）をいかなる理由で「無間」と名付けるのであろうか。それは、一には己の為した行いの果報が、…直ちに次ぎの生の身にその報いを受けるからである。二には、…地獄にある間は苦の報いを受け続け、楽を受けることが一瞬もない（からである）。…三には、報いを受ける時の長さが終えることがないから。…四には（地獄に生まれてからその）命の絶えることがないから。…五には、…五逆の罪〔を犯した故〕地獄に生まれて広大な地獄に一人在っても隅々までおよび、又一切の人が墜ちても更に邪魔し合わない、その故に無間と名づけるのである。…第三の順後次受業というのは、…もし人がこの生に於て或いは善にせよ、或いは悪にせよ、造った事は或る場合には第三生に、或る場合には第四生に又は百千生の間に於ても善悪の報い〔禍福〕があることを順後次受と名づけるのである。…悪を造りながら、悪（である）とも知らないから、悪業を造っても悪業の報いなどあるはずはないと邪悪の考えを持つことになるから〔要注意〕。悪業を造れば悪の報いがあることを知らない（としても）、悪の報いを受けないということは決してない。…悪業を行じようと思う事〔つまり、計画的な悪業の悪意自体〕が無間業である』（「三時業」）⁽²⁷⁾。

『因果の道理〔善因善果、…悪行悪報、…善行福報、…悪行禍報等〕は歴然として明白である。かくれた処は一つもない。悪行をなす者は地獄に落ち、善行をなす者は一切の苦を解脱することができる。一分一里もこの真理に相違はない。…また因果の道理を否定するもの共は、その罪咎によってはかり知れない災害を受けることを免れることはできない。…この故に仏法参学者〔見仏慈人の道を生きようとする者達〕が、…先ず第一に、あらゆる因果の道理を明める〔正しく理

解する] べきである』(「深信因果」巻⁽²⁸⁾).

道元禪師が通徹した「因果法」とその一具現である「業報法」は絶妙の極まりない**仏命の至聖心を本源とし、仏命の無量活現の一相一面である宇宙万物とその秩序の普遍的、不転倒で不偏公正な道理で在る以上、人間界とその生死苦楽の隅々までおよび、万人人衆の本然性質、その善悪的性向と来生境涯の貴賤および禍福を決定する事理である。**よって、悪行を追求する者は性別、人種、身分、職業、地位、貧富、政教や国籍の例外なく、罪悪の軽重に順応して今生中でなければ来生において必ずその存在境遇と諸性能徳力が劣化するであろう。一方、断悪奉善と敬仏慈人の生き方に励む者は「非国民」、「邪教徒」や「共産党員」と称せられても、「不敬罪」の故に村八分にされても、その真善の度合いに順応して今生中でなければ来生において必ず存在様態とその諸性能徳力が向上され、境遇とその慶福感が増強されるであろう。この因果応報が厳正で歴然たる普遍法として絶対不偏の効果を生ずると確信していた道元禪師は、正伝仏道の核心である無我的で利他的な断悪進善と終生誠実な教行信証の実践を切に訴え、特に死ぬ直前、死ぬ瞬間とその直後にも全力と誠意を尽くして『南無帰依仏、南無帰依法、南無帰依僧』(「道心」巻)を唱えるように強く奨励するのである。

4. 人格的自己の今生諸行、その死と来生の禍福

釈尊を初め、彼が教行信証していた見仏慈人(又は敬仏慈人)の道に魅了せられ保持して来た諸聖哲(諸仏諸祖)にとって人衆の意味、特にその禍福を考える上で下記の問いとその解決が最重要であった。我々も同じ問いに直面し、何れにせよ、その自答に取り組まなければならないであろう。

- 一. 人が何故この世でこのような境遇を持って生まれ、どうして様々な苦楽を味わい、そして死ななければならないのかという問いである。つまり、人の生死、苦楽、病老の由来とその円満で悦ばしい、納得行く解決が各自人生の一大事であって、何れにせよ、何時かが必ず、遅くとも死に直面した時に最大の関心事となるであろう。
- 二. 人格的な身心を受けて生死とその苦楽を生きる仏命の妙現、中有を生きながら完熟する仏命の妙現、そして新身心を受容して新個有として生まれ変わる仏命の妙現の本性的な同異の問題。換言すれば、個人をして生きる自己に死後があるのかないのか、死ぬ前の自己と生まれ変わる自己とは同一のモノかどうかという問題である。
- 三. 個人をして生きた自己(つまり仏命の人格的妙現)に死後があるとすればそれは個性的な死後であるのか、それとも非個性的なのか。そして、その自己が無条件で幸福に満ちた存在境涯を獲得するのか、それとも不幸な死後もあるのか。さらに、自己の今生行為、その迷悟、善悪と意向がその自己の死後境遇の貴賤と禍福にも影響を及ぼすかどうかという問題である。
- 四. 個人をして生きる自己の来生境遇の貴賤と禍福が如何にして、そして何時決まるのかという問いである。

仏命の無限活現成を事実として認め、仏命の自内性を究極の源泉と拠り所とする万劫の現象界、万有の諸活動とその普遍的な道理の一つである因果法と業報法を認めるならば個人的な諸活動の本源であってその決定者である人我又は他のあらゆる個現や自己も当然、自ら起こし遂行した行動に責任が伴い、その果報も受容しなければならないと是認せざるを得ない。更に、因果法とその一具現である業報法（普遍正義）を**是認するならば、今の人生を生きる自己、迷悟と善悪を行ずる自己、死を体験する自己、中有を生きながら変成し熟成する自己と新身心を受けて生まれ変わる自己がその生命（存在）の深奥において根本的に同一のモノでなければならないと認めるのも当然であり、自明の理であろう。**勿論、現世人間界において人格的な身心を享受する以前の生涯と境遇を有して生まれ、当時の本性とその徳力に順じて迷悟と善悪を行じながら苦楽と病老を味わい、死に、その後の中有において今生の徳力とその性能を本性とするこの人格的な妙我に変成されたのである。生まれ変わった個我にも上に言及した普遍的な秩序の諸道理が有効であり、**当然因果業報の道理も100%に適用されるのである。**よって、正伝仏教、特に道元禅によると、人格的妙我を含む仏命活現の諸妙現（万我物事象）の生死、病老、苦楽と迷悟の輪廻が嗔癡貪を発祥地とする迷妄と罪惡の自然で必然的な果報である。そして、生死苦悩の輪廻を脱出するために断悪奉善と断貪開悟を軸とした敬仏慈人の生き方は唯一の正道であると正伝仏教の諸聖哲が一貫して教示するのである。一方、個別の人生を生きながら諸々の善悪迷悟を執行する自己が死によって100%で全面的に壊滅され、死後の中有中に**生前の自己と存在的な継続を有しない全く新しい自己**が創生されるならば、この新自己は自分が全く関わらなかった善悪行の自然で必然的な果報を何故に受容しなければならないのか？ 又、もし人をして生きる自己が死の瞬間に100%で全面的に絶滅したのであれば「因果法」も「業報法」も虚構で謬悠の説であるだけでなく、それ等の法に従って生きた者達の無我的で猷身的な行いの全てが荒唐無稽であり、釈尊とキリストは人類の最も卑劣な欺瞞師であって、彼らに憧れていた万代万人の聖哲、例えばナガルジュナ、道元、親鸞、アウグスティヌス、聖トマス・アクィナスやマザー・テレサも愚昧闇鈍の者たちであると認めざるを得ない。

人甞を生きた仏命妙現の来生、その禍福的な境遇と徳力性能が同一の妙現の前生諸善悪に順じた果報として死ぬ瞬間で始まる「中有」中に完備され、新創されるという立場は仏道教学の発展においてかなり早い時期に樹立されたのである。「説一切有部」という上座部仏教の一派の阿毘達磨大毘婆沙論は人間をして生きた自己の中有とその存在様態の変化において主として中有の期間、自己の形状と質量、自己の性別、自己の姿勢、自己の衣食、自己間の関係と連絡方法、自己の性能、自己の生まれ変わりとその入胎方法について真面目に洞察し、説明するのである。

人をして生きた妙現の中有の期間について三説がある。一説によると、万我が一律して七ヶ日の中有を過ごす。別説は万我の中有を一律に四十九ヶ日とする。三説目は各妙我の諸前生の行類とその善悪質の軽重に順応して、次生の存在形状とその徳力性能を見込んで七ヶ日から四十九ヶ日までの間に完備されるという不定期間を主張する。

中有を生きる妙我の性別について次のような見解が有力である。個人として生きた妙現は生類の世界、超物質や超生類の世界に赴く場合は人我の本性とその諸徳力が適切に変成され、趣く先のそ

れぞれの世界とその万有に適した固有の徳力と性能，例えば迷悟的，善悪的と美醜的な性向，諸感覚，知能，意欲等の能所が新創されるが，男根や女根は設定されない⁽²⁹⁾。一方，前生諸悪の果報として無機物質や地獄の世界へ生まれ変わろうとする妙現には男根や女根だけではなく，**情緒，悟智や自由意志等の如き有機（諸生類）世界に固有の能力が一切稟賦されず**，無機物質や地獄の各世界に最適な形態，性向，質量，色，力，磁気等のみが完熟するのである。

次生の新世界に**趣く妙現**の「衣」，つまり外見と容姿の質及び妙現の**中有的**生命力を養う「糧」について下記の如く説述する。輪廻転生を超脱し成就しようとする妙我は非現世的，絶妙で絶美の光明を「衣」とし，現象的な「食料」が一切要らないのである。天上界に生まれ変わろうとする妙我は極めて精妙で清浄な光の衣をまとい，極めて清浄な香りを糧とする。人間界や動植物界に趣こうとする妙我は各界に固有の容姿と容貌をまとい，それぞれに特有の香りで自命を養う。そして，餓鬼界，悪魔界や地獄に生まれ変わろうとする妙現は全裸で前生罪悪の軽重に遵応して趣く先の界類，存在様態とその形状に最適な穢醜を身体の容貌とし，糞便，臭腐や屍臭等の激臭で自分の存在を養っていると観られる。

妙我の中有的，つまり霊妙な「身体」の姿勢について次のように述べられている。生前より素晴らしい世界へ赴こうとする妙我は頭上足下の姿勢，同類の世界へ赴く妙我は横向きの姿勢，そして生前より低劣な世界へ趣こうとする妙現は頭下足上の姿勢を採るのである。

各々の妙我は中有を生きる間にその前生諸行の迷悟度合いと善悪質の軽重に順従してその本性徳力，形量と境涯が自然で必然的に進退したり増減したり，貴賤化したり清濁化したり，改善したり改悪したりするという精妙極まりない変成万化が繰り返され，妙現の新本性とその徳力も完熟され，創生されていくのである。こうして，動植物界，餓鬼界，悪魔界，無機物質界や地獄界へ趣く妙我にそれぞれの世界と我物事象の種類に最適で相応しい存在の徳力性能，形状と境遇の能態が具備される。人間界に生まれ変わろうとする妙現に新しい個性的な人格の徳力性能，その力量と新心身への性向が完備される。更に，天上界や菩薩界に転生しようとする妙我には人間の百千万倍の善智慶福の力量と最高に精妙で輝かしい身へ趨向が完備される。又，一切の輪廻転生とその束縛を超脱し成仏しようとする妙現には在りとあらゆる善智慶福の徳力性能と活現の力量，存在の様態とその形状の**向上，精妙化，増強，貴盛，清浄化と光明化への無限大の趨向という新性質が熟成し設定され**ると考えられている。

中有を生きるあらゆる妙我の相互把握，相互理解，相互関係と相互連絡が次のように説述されている。同じ世界へ趣く妙我はお互いを感知するし，より下位の世界へ生まれ変わろうとする妙我をもみる事が出来るが，より上位の世界へ赴こうとする妙我をみることも理解することも出来ない。さらに，人間界と下位の諸現象界の万我物は原則として中有の世界を直接に感知したり，完全に理解したり又は連絡を取ったりする事が出来ないが，**釈尊**や過去六仏はそれが出来たのである。又，天上界の諸妙我は諸世界とその中有を何時でも容易に感知し非常に高度な理解力を有する。そして，成仏した諸妙我は一切世界，その諸中有と万我物事象を何時でも自由に感知し，その在り様の詳細をも正しく通徹する事が出来ると見做されるのである⁽³⁰⁾。

死した仏命妙我の存在形状である中有はかなり霊妙で極めて精細な存在様態の世界であり，万我

の生前諸行の正邪と善悪の精算の時境であるから一切輪廻転生界の万我物事象がその秩序を乱したり、その経過に干渉したりする事が出来なければ各妙我の諸前生万行の価値、諸行熟成の果実（果報）である各妙我の新自性とその徳力性能の創生及び各妙我の貴賤的で禍福的な境遇への新性向を絶対に変えることも左右することも出来ない。さらに、現世の人間界と違って、中有は一切の妙我にとって「誠実の時境」、「自業自得の時境」と全前生諸行の自然で内外的な干渉のない、因果業報法に遵従した客観的で不偏な果報完熟の時であるから同類や近い世界へ趣く妙我たちはお互いに連絡、意思の疎通とその表示が出来るが、お互いを礙げたり援助したり、根回ししたり小根を活かしたり、又は自他を騙したり搾取したり、恐喝したり陰湿的に圧力をかけたりする事が一切出来ない。中有は差別的で偏見的な国法や派閥利害法ではなく、絶対的で正慈の窮まりない仏命活現成法の徹底的遂行とその栄光の公現だからである。

勿論、妙我間の意思表示とコミュニケーションの可不可とその度合いも妙我が赴こうとする世界と個的な徳力性能に比例することは自明の理である。例えば、天上界へ赴く妙我は人間界、動物界、植物界、餓鬼界や無間地獄とそこへ生まれ変わろうとする諸妙我をみても理解しても、彼らの「意向」を通過したとしても彼らの経路、変成と熟成の経過、その内実と結果および諸行動を礙げたり又は利したりすることも出来ない⁽³¹⁾。一方、地獄へ趣こうとする妙現や既にそこに住ずるモノは人間界やここに生まれ変わろうとする妙我を感知的に把握することが出来なければ礙げることが出来ないし、意思の能力もないので当然何も伝えることも出来ない、極めて悲惨で想像を絶する駭れな形状であると考えられている。

妙我の新自性、その徳力性能の諸性向が完成された後、妙我はその自性の諸性向に従って生まれ変わるべきの世界と適した「父母」の辺りへ移動し、当界の秩序に順従して「入胎」し、適切な成長等の過程を経てその世界に生まれ、その世界と自分の新境涯に遵従した「苦楽」を味わい、新性格とその諸能力を自らの手で活用しながら自らの次生とその禍福的な新境遇を準備するのである⁽³²⁾。

こうして、釈尊を初め、過去の六仏とその教行信証に魅せられた諸聖哲によると、人として生きる仏命妙現の今生境遇とその禍福はその妙現の前生諸行、特に敬仏慈人や拒仏拒慈の生き方の自然で必然的な果報である。つまり、我々一人一人をして生きている仏命諸我の次生形状の貴賤とその境遇の禍福も又、今生における我々の敬仏慈人や拒仏拒慈の生き方によって日々形成しつつある。そして、我々の今生諸行の正邪と善悪が死後の中有中に因果業報法に順従して完熟し、次生の禍福を不退的に設定するであろうという立場は仏道正伝の眼精であり、保持されて来た通説である。

<続く>

註

- (1) 『仏教聖典』、山口益（編）、平楽寺書店、³ 1974（'74）、p.18.
- (2) Ibid, pp.40-41, 47-48. 以下に、〔 〕という括弧内の文は原文の意味をより明確で解り易くするために私が付加したものである。原文にはないが原文の意味が変わらないように誠意を尽くしたのである。
- (3) Ibid, pp.66-67.

- (4) Ibid., pp.188-190.
- (5) Ibid., pp.225-226.
- (6) Ibid., pp.243-246, 248-249.
- (7) Ibid., pp.135-137.
- (8) Ibid., pp.140-141.
- (9) Ibid., p.145.
- (10) Ibid., pp.153-154.
- (11) Ibid., p.250.
- (12) Ibid., pp.45-47.
- (13) 『正法眼蔵』, 中村宗一訳, 誠信書房, ¹⁸ 1990 ('71), vol.1, p.109. 『正法眼蔵』, 本山版縮刷, 鴻盟社, ¹² 1991 ('52), p.233.
- (14) 『仏教聖典』, pp.877-879.
- (15) Ibid., pp.888-889, 891-892.
- (16) Ibid., pp.892-894.
- (17) Ibid., pp.997-998, 1001-1002, 1069.
- (18) Ibid., pp.630-636, 638-641.
- (19) 『往生要集』(上下), 源信(石田瑞磨訳注), 岩波文庫, ⁵ 2003, 引用文は上巻, pp.329-330, 下巻, p.191.
- (20) 加藤咄堂, 『大死生観』, 中籍出版, ² 1982 ('08), pp.299-303.
- (21) 『人甕の禍福的運命』, その三, 「禅仏教による人甕の禍福的運命」という章の中で, 特に ④ 人間的妙我とその死後, ⑤ 今生の善悪迷悟と妙我来生の禍福, ⑥ 『中有』を生きる妙我, ⑦ 成仏又は無間地獄に趣いて生きる自由, そして ⑨ 仏と人間的妙法の栄光を参照.
- (22) 『正法眼蔵』, 中村宗一訳, vol.4, p.35. 『正法眼蔵』, 本山版, p.710.
- (23) 中村宗一訳, vol.4, pp.396-398. 本山版, pp.737-738. さらに, 中村宗一訳, vol.2, pp.95-101 および, 本山版, pp.75-82 を参照.
- (24) 中村宗一訳, vol.4, p.403. 本山版, p.768.
- (25) 中村宗一訳, vol.1, p.302. 本山版, p.330.
- (26) 中村宗一訳, vol.3, p.94. 本山版, pp.558-559.
- (27) 中村宗一訳, vol.4, pp.100-101, 178-195. 本山版, pp.676-682, 691.
- (28) 中村宗一訳, vol.4, pp.175-176. 本山版, pp.743-744.
- (29) キリストによると, 『復活の時の人間は, 娶りもせず, 嫁ぎもせず, 天にいる天使と同じようになる』と. 『聖書』(新約篇), p.38 (マテオ, 22. 30-31).
- (30) 聖トマスの『神学大全』の中には, 救われた人魂, 救われない人魂, 現世界に生きる人間, 天使と悪霊とが持つ自他界の把握力, 感知力と理解力について酷似する見解が多い. 『神学大全』, vol.6, pp.357-403 (特に人は神を如何に認識するかと, 死によって人体を離れた人魂は如何に自他の世界を把握して理解するか). 同じく, vol.4, pp.207-283, 403-422 (天使と悪霊とが自他界を認識する能力について). 同様に, vol.8, pp.75-237 (特に天使は如何にして他に働きかけるか, 天使の統轄力, 天使と人間との相互関係, 悪霊と人間との相互関係について).
- (31) カトリック信仰とその教理によると, 救われた人魂, 諸聖人や地上に生きる義人の祈り, 取り次ぎと執り成しが煉獄に居る人魂又はこの世にまだ生きている悪人を助けることが出来るが, 唯一の神, その無償で救済的な恵愛を意図的に拒み, 悪意や自己本位的に隣人愛を無視して「愛天愛人」の道に悖って生き, 地獄に落ちた人魂の境遇と環境に影響を一切及ぼすことが出来ないとキリストの時代から一貫して今日まで保持されている立場である.
- (32) 塚本啓祥, 「死から転生まで - 中有とは何か」, in: 大法輪編集部編, 『死とは何か』, 大宝輪閣, ⁵ 1991 ('84), pp.119-125. 加藤咄堂, *ibid.*, pp.296-316.

人間一人一人をして生き, 様々な活動を行い, 今生においても来生においてもその果報を享受する能力を本有する主体, つまり, 成仏する能力と同時に無間地獄に往生する能力を持ち合わせている主体(仏命の人格的で個性的な妙現)と, いわゆる「靈魂」の仏教的な理解をテーマとした日本仏教学会の大会が2005年に行われた. 日本仏教界を代表する学派の研究者が各々の立場から「仏教の靈魂観」を論説し, その要論が日本仏教学会年報第71号(2006年)に掲載されている. その中で「仏教の靈魂観」, 「空海の靈魂観」, 「靈魂観への視座」, 「道元の靈魂観」, 「浄土真宗における往生の主体」, 「浄土真宗靈魂観」, 「アビダルマ仏教における靈魂の存在について」や「世観のアートマン批判」という論考が非常に注目を惹くものである. しかし, 生死を生きる個人的我と様々な世界に輪廻転生をする主体の同一性を強く示唆する源信著の「往生要集」の試論が何故かない. 更に, この国の最高の聖哲とも言える道元禅師の末期著作をかざる『正法眼蔵』の「行持」(1242, IV, 5)を出発とし, 「遍参」(1243, XI, 27), 「三時業」(著年月日不明), 「深信因果」(著年月日不明)を経て, 「道心」(著年月日不明)を頂点とした妙我観(人をして生き死に, 中有で次生の自性が造り上げられた後に異界に転生する妙我の同一性観)の確立に興味を持っているが, それについても, 何故か言及も見当たらない.

使用文献

禅仏教関係

- | | | | |
|------------------------------------|----------------------------------|----------------|--------------------------|
| 仏教聖典 | 山口益著 | 平楽寺書店 | ² 1974 [’74] |
| 正法眼蔵【本山版縮刷】 | | 鴻盟社 | ¹² 1991 [’52] |
| 現代語訳正法眼蔵全12篇 | 西嶋和夫訳等 | 金沢文庫 | ⁸ 1993 [’70] |
| 全訳正法眼蔵4篇 | 中村宗一等訳 | 誠信書房 | ¹⁸ 1990 [’71] |
| 全訳正法眼蔵上下 | 高橋賢陳訳 | 理想社 | ⁵ 1988 [’72] |
| Shobogenzo, 4 vols. | K. Nishiyama, trsl., Nakayama S. | | ⁵ 1986 [’75] |
| 正法眼蔵4篇 | 水野弥穂子校注 | 岩波書店 | ¹⁵ 1998 [’90] |
| 正法眼蔵随聞記 | 水野弥穂子訳 | 筑摩叢書 | ³³ 1987 [’61] |
| 正法眼蔵思想体系全8篇 | 岡田宜法著 | 法政大学出版局 | ² 1964 [’56] |
| 正法眼蔵啓迪全上中下篇 | 西有穆山著 | 大法輪閣 | ¹⁴ 1990 [’65] |
| 正法眼蔵参究・現成公案 | 安谷白雲著 | 春秋社 | ⁵ 1981 [’67] |
| 正法眼蔵全講全24篇 | 岸沢惟安著 | 大法輪閣 | ³ 1988 [’74] |
| 正法眼蔵・生死を味わう | 内山興正著 | 拍樹社 | ² 1987 [’78] |
| 正法眼蔵全巻要解 | 中村宗一等著 | 誠信書房 | ³ 1988 [’79] |
| 正法眼蔵釋意 | 橋田邦彦著 | 山喜房仏書林 | 1980 |
| 正法眼蔵の哲学 | 田中晃 著 | 法蔵館 | 1982 |
| 海と空と光 | 森本和夫 | 春秋社 | 1983 |
| 正法眼蔵・摩訶・一類・即心是仏を味わう | 内山興正著 | 拍樹社 | 1983 |
| 正法眼蔵・有時・諸悪莫作を味わう | 内山興正著 | 拍樹社 | 1984 |
| 生を明らめ死を明むるは | 余語翠巖著 | 地湧社 | ⁷ 1990 [’84] |
| 辨道話 | 岡田利次郎著 | 彌生書房 | 1985 |
| 正法眼蔵講釈上下三四篇 | 吉田寿一著 | 山喜房仏書林 | 1986~91 |
| 正法眼蔵・現成公案を味わう | 内山興正著 | 拍樹社 | 1987 |
| 正法眼蔵・仏性を味わう | 内山興正著 | 拍樹社 | 1987 |
| 正法眼蔵講話全4篇 | 西谷啓治著 | 筑摩書房 | 1987 |
| 正法眼蔵の心 | 有福考岳著 | NHK ブックス | 1994 |
| これ仏性なり | 余語翠巖著 | 地湧社 | ³ 1990 [’86] |
| 死とはなにか | 大法輪編集部編 | 大法輪閣 | ⁵ 1991 [’87] |
| 日本仏教学会年報第71号 | 日本仏教学会編 | | 2006 |
| 仏教における信の問題 | 日仏学会編 | 平楽寺書店 | ⁵ 1986 [’63] |
| 道元禪の神髓 | 沢木興道著 | 誠信書房 | ¹¹ 1999 [’63] |
| 世界思想と道元 | 鏡島元隆編 | 春秋社 | 1980 |
| 道元禪の世界 | 田中晃 著 | 山喜房仏書林 | 1989 |
| 道元学の揺籃 | 池田魯参著 | 大蔵出版 | 1990 |
| A Study of Dogen | Abe M. | NYU Press | 1992 |
| 道元思想のあゆみ全3篇 | 曹洞宗学研編 | 吉川弘文館 | 1993 |
| 往生要集上下 | 源信著(石田瑞磨訳注) | 岩波文庫 | ⁵ 2003 [’92] |
| 密教原理 | 小野清秀著 | 国書刊行会 | ² 1986 [’15] |
| The Central Philosophy of Buddhism | Murti T.R.V. | Unwin P. backs | ² 1987 [’55] |
| 仏教における証の問題 | 日仏学会編 | 平楽寺書店 | ⁴ 1978 [’66] |
| 仏教の人間観 | 日仏学会編 | 平楽寺書店 | ⁶ 1986 [’68] |
| 佛性の研究 | 常盤大定著 | 国書刊行会 | ⁴ 1988 [’73] |
| 弘法大師の思想と宗教 | 神森隆浄著 | 日本図書センター | 1976 |
| 仏性論研究 | 武邑尚邦著 | 百華苑 | 1977 |
| 悟りと救い | 日仏学会編 | 平楽寺書店 | ³ 1989 [’79] |
| 仏教における生死の問題 | 日仏学会編 | 平楽寺書店 | ³ 1988 [’81] |
| 真言の教学上下篇 | 勝又俊教著 | 国書刊行会 | 1981 |
| 解脱 | 日仏思想研編 | 平楽寺書店 | ² 1988 [’82] |
| 業論 | 福原亮巖著 | 永田文昌堂 | 1982 |
| 仏性思想 | 小川一乗著 | 文栄堂 | 1982 |
| 仏教における正と邪 | 日仏学会編 | 平楽寺書店 | 1983 |

弘法大師空海全集第二卷 一切は空	石川良泰編代 平田精耕著	筑摩書房 集英社	⁷ 1990 ['83] ⁵ 1983 ['83]
Buddhist Cosmology 親鸞の哲学	Kloetzli, W.R. 寺田弥吉著	Motilal Banars 太陽出版	² 1989 ['83] 1984
空と無の世界	室生貞信著	書苑社	1985
仏性とは何か	高崎直道著	法蔵館	² 1990 ['85]
日本仏教宗史論集第8篇	河村考道編	吉川弘文館	1985
人間と差別と宗教	部落差別研篇	中外日報社	1985
菩薩観	日仏思想研編	平楽寺書店	1986
仏陀観	日仏思想研編	平楽寺書店	1988
密教概論	高神覚昇著	大法倫社	1989
密教の仏身観	加藤清一著	春秋社	1989
禪と戦争	ビクトリア・B. 著	光人社	2000
修証義通解	安藤文英著他	鴻盟社	² 1989 ['50]
キリスト教関係			
Biblia Sacra <Vulgata>, 2 vls. 聖書〈旧約・新約〉	Deutsche Bibelgesellschaft バルバロ, F. 訳	講談社	⁴ 1985 ['69] ² 1981 ['80]
Catechism of the Catholic Church カトリック教会のカテキズム	Holy See 日本カトリック司教協議会	Lib. Ed. Vaticana カトリック中央協議会	² 1997 ['94] ² 2002 [同年]
(第二ヴァチカン)公会議公文書全集 [別巻] カトリック教会文書資料集	南山大学監修 デンシンガー/シュンメッツ著	中央出版社 エンデルレ書店	² 1976 ['69] 1974
神学大学 (トマス・アキナス著), 10巻 カトリック教会の道徳〈アウクスティヌス著〉	高田三郎 (全訳責) 上智大神学部編	創文社 創文社	1960~1967 ³ 1978 ['63]
生命の尊さを語る パウロ・親鸞・イエス・禪	マザー・テレサ著 八木誠一著	中央出版社 法蔵館	² 1985 ['83] ² 1986 ['83]
聖書思想事典 神学大全入門	デュフル・X. L. 沢田和夫	三省堂 あかし書房	1983 1987
マザー・テレサ 死と永遠の生命	和田町子著 大林浩著	清水書房 ヨルダン社	³ 1996 ['94] 1994
希望の扉を開く	ヨハネ・パウロ II 世著	同朋社出版	1996
そ の 他			
儒教聖典 神道聖典	仏教伝道協会 仏教伝道協会	廣濟堂 廣濟堂	² 1984 ['81] ² 1983 ['83]
大死生観	加藤咄堂著	史籍出版	² 1982 ['08]
Patterns in Comparative Religion Le Grandi Religioni, VI vls.	Eliade M. Rizzoli Editore	Sheed & Ward	² 1971 ['58] 1964
仏教とキリスト教の比較研究 万有百科事典, vol.4 (哲学・宗教)	増谷文雄著 小学館編	筑摩書房 小学館	²¹ 1985 ['68] 1974
Storia delle Credenze e delle I.R. 世界の幸福論	Eliade M. 山田孝雄編	Sansoni Ed. 大明堂	1979 1979
神道の生死観 新宗教事典	安蘇谷正彦著 井上順孝編	ぺりかん社 弘文堂	1989 1990
天皇制と部落差別	上杉聡著	三一新書	² 1996 ['90]

The Human Death and Post-mortem

[Part 1]

～ The Vision of Japanese Zen-Buddhist Anthropology～

*

This paper outlines the Japanese orthodox Buddhist perception, understanding and interpretation of the human death, the post-mortem period, their meaning, the role in human life and their relation to the essential potentiality of every human person to choose, strive and attain one of two existential states of eternal destiny ingrained in the essential nature of all human beings. All of the orthodox Buddhist thinkers affirm the inseparable, essential and existential dependence of all human beings on the Buddha-nature. All of them emphasize the innate orientation of the human nature, directed towards the ultimate and eternal yet “in se” bi-polar goal of human existence. In Buddhism it is the eternal bliss of Nirvana or the doom of reincarnations.

Buddhism i. e. Shakamuni, the Early Hinayana and Dogen’s branch of Japanese Mahayana Zen teach that, the ultimate yet freely acquirable goal of human existence is the eternally non-transmigrational, enlightened, continually growing happiness and upgrading of individual form of existence or, the eternally transmigrational, continuous degeneration and degradation of its essential potentialities resulting in augmenting of its own doom. Every human being, as an individualized and personalized ‘concretization’ (‘manifestation’, ‘spark’) of the immanento-transcendent Buddha-nature, is naturally (‘per se’) endowed with all virtues necessary for development and realization of its innate bi-polar disposition, opened towards eternal happiness and improvement of its form of existence or, towards the eternal swelling of its doom and deterioration of its mode of existence.

‘Death’, according to the orthodox Buddhism, is not an annihilation of existence of a personalized manifestation of the Buddha-nature (‘Buddha-spark’) but a cessation of its existence and activity in the form of a human being with simultaneous acquisition of a new form of existence, corresponding to the quality of its terrestrial deeds and in accordance with universal order of moral ‘retribution law’ (「因果法」, 「業報法」). Shakamuni himself, the early Buddhist tradition and Patriarch Dogen clearly admit the existence of life ‘after death’ as well as a preservation of individual consciousness after death. They admit that though we are free to choose our own way during the terrestrial life yet, at the same time they emphasize very clearly that we will be held accountable even for the lightest moral evil or good until we satisfy the justice of the universal and absolute laws of retribution. In practical terms it means that we will harvest after our death what we had sown during our terrestrial and previous lives.

Agama-sutra in the ‘Dicta of the Enlightened One’ records the following talk of Shakamuni made to his disciples about the eternal law of causation and retribution after death. Shakamuni said: “**With the pure celestial eye transcending that of the ordinary man, I had seen a great number of people going through the process of dying and being reborn again [中有]. Each of them, in accordance with the ‘law of retribution’ was being reborn. One in the despicable, the other in the honourable social position. One was reborn in a beautiful, the other in an ugly form of existence. One was born into a world of goodness, the other into the world of evil. I had seen and understood that all these rebirths themselves are not only the sufferings but are also the agents of new miseries**” (chapter 11). Again, in one of his great colloquials, reenacted in the Agama-sutra, Shakamuni had refused to give any statement concerning the “**continuation of the fate of human life after death, the annihilation of the human life after death, or even to give any allusion or hint regarding the possibility or impossibility of its existence after death**”. (Ibid., Buddha’s Teachings, chap.1.8). Yet in another great discourse during his last terrestrial trip Shakamuni states as follows: “**Disciples! I see with my enlightened eye.... that the hearts and minds (souls) of some people living in this world are defiled. If those people were to die now, they would surely be carried (by the power of retribution law) to the infernal worlds and abandoned there to their fate. Disciples, do you know why all that would happen? It would happen because the hearts and minds of those people are defiled! Disciples [let me tell you]! When people with defiled hearts and minds die, they embark on a new way of wretched, evil, agonizing and infernal reincarnations. Disciples! Yet the hearts and minds (souls) of some people living in this world are righteous and pure. If those people were to die now, they would surely be carried (by the power of retribution law) to the heavenly worlds to live happily there. Disciples, do you know why all this would happen? It would happen because the hearts and minds of those people are righteous and pure! Disciples [let me tell you]! When people with pure hearts and righteous minds die, they embark on a new way of advancing, perfecting and celestial reincarnations.** (Ibid., Buddha’s Teachings, chap.2.10). Can any reasonable and scientifically minded person think that Shakamuni, the early Hinayana and Mahayana patriarchs (of Muryoju-sutra, Nirvana-sutra and Ashuku-sutra) would talk about the eternal law of the cause-effect and moral retribution even after human death if they had been convinced in the total annihilation or 100% alteration of the human and personalized manifestation of the immanento-transcendent Buddha-nature?

In the chapter on 'Life and death' of his epoch making masterpiece entitled "The Eye and Treasury of the True Law" (『正法眼蔵』の「生死」) Patriarch Dogen says: **"There is no life and death when Buddha [the immanento-transcendent Buddha-nature] is within life and death. If there is no Buddha within the life and death, then there is no illusion about life and death.... Accept life and death as [a manifestation of] Nirvana. Do not hate either one, and do not seek Nirvana [apart from life and death].... It is a mistake to think that life changes into death.... Life and death themselves are [the different manifestations of] the life of Buddha-nature...."**

In the chapter on 'Ceasless practice (of Zen life)' Dogen expresses his view about death and life beyond it very clearly saying: **"To think that the [personalized] living being perishes is a stupid conclusion, and to think that [a man during] death has no consciousness is a foolish misunderstanding. These two views — the living beings undergo no death, and the dead have no consciousness — are rubbish".** In the chapter on 'Direct study under a master' he says: **"When a person dies the real Buddha-life-spark (心・真自己, i.e. the individual and personalized Buddha-life spark) does not remain in the body. When death comes it is complete death. Consequently we are able to conclude that the entire person is the Buddha-life spark, and the Buddha-life-spark is the person. The Buddha-life-spark and the human being are not two separate beings. The Buddha-life-spark and the human person are like the front-and-back of one and the same page. The beings of all cosmic eons and the infinity of all eons are also like the front-and-back of one and the same page, and finally, the all kinds of deaths and all of lives are also like the front-and-back of one and the same page. We must thoroughly and profoundly inquire into these truths".**

In the chapter on 'Karmic retribution in the three periods of time' Dogen warns those who think that after death they can escape the execution of the eternal and universal law of moral retribution and responsibility for their deeds. Quoting the teachings of the Indian nineteenth patriarch Kumaratta, Dogen emphasizes the following: **"Like many others you are unaware that karmic retribution occurs at three different periods of time. When you see the compassionate die young, while the aggressive and corrupted live long, and the malevolent are happy while the virtuous are unhappy, you doubt the existence of causality and fail to see its real relation to happiness and doom of suffering. This is a mistake. Causality is governed by a principle not dissimilar to that which makes that a shadow follows its form, and will not diminish even with the passing of a hundred thousand kalpas [one span of kalpa-time accounts for 4.320.000.000 years]....The karmic retribution occurs in (1) one's present life, (2) one's next life, and (3) after two successive lives".** In the chapter on 'Deep belief in causality' Dogen states that **"The principle (universal law) of causality is straightforward: all those who do wrong fall into hell; all those who do good attain enlightenment (nirvana). This law is eternal, works uninterrupted and never shows even a slightest inconsistency. Those who deny the law add a new dreadful sin and do a great harm to themselves. They, too, will never escape the effective execution of the law".**

In a very important chapter entitled 'The essence of Buddhism' (『道心』) — almost completely ignored even by his followers, very often omitted in official expositions, interpretations and translations, and which was written most probably a few months before his death — Dogen clearly recommends and encourages all his followers to confess their personal faith in the Supreme Buddha, their adherence to the true Buddhist teachings and to the Buddhist community, especially on the death-bed, in the moment of dying, after death, during the gradual destruction of old and formation of individual ego's (Buddha-spark's) new essence, during the proceeding towards newly destined incarnation, during the process of incarnation, during the growth as a new fetus and during the new birth into a new world. He also states that this new form of existence is nothing more than a concretization of the ego's past lives' deeds and the impartial retribution for them. Let me repeat once more: **would the Patriarch Dogen recommend 'such a meaningless practice' if he had not believed in the eternal and substantial identity of individual ego-life and a continuity of its 'core-consciousness', at least after the death?** In the chapter on 'Karmic retribution in the three periods of time' Dogen makes clear that, whether we know or not, whether we accept, reject or doubt the laws of causality and retribution, whether we live a charitable or a wicked life, whether we perform good or evil intentionally or unintentionally, **"essentially it makes no difference. The karma of evil act is 'bad karma' — and its result and retribution is disastrous. [On the other hand, the karma of good act is 'good karma' and its result and retribution is beneficial for its doer.] Premeditated wrong-doings do however, have the additional effect of transforming our good karma into a bad one, because bad intentions, whether recognized as such or not, are themselves wrongful acts. Thus it is a terrible mistake to think that we will not be held responsible for our evil acts which we don't recognize as evil, or even think that they are good".**

Finally we should not forget about the Buddhist position with regard to the people committing extremely hideous and dreadful crimes, such as the premeditated killing of one's parents, the premeditated killing of the enlightened ordained Buddhist, causing disunity within the community of believers, profanation and slandering of the Supreme Buddha, Buddhism and its believers. Apart from these traditional misdeeds recorded in many Buddhist canons, we witness today some new extremely malicious and appalling evils such as premeditated killing of one's own defenseless and innocent children (abortions), glorification of war criminals, cold-blooded extermination and economic exploitation of the poor and defenseless people in the name of God or Buddha, in the name of justice, in the name of freedom, in the name of international and spiritual progress and cooperation... etc. Buddhist orthodox teaching upholds that such an evil-natured villains are unable to attain eternal happiness.

(2007年12月5日 受理)